



図書だより

7月発行 第4号
かほく市立高松中学校図書館



1学期の読書を振り返ってみよう

7月に入りました！みなさんが待ちに待った夏休みまで、あともう少しになりましたね。さて4月から3ヶ月ほど経ちますが、みなさん最近本は読んでいますか。

毎日のように借りに来ている読書好きな1年生がいる一方で、2・3年生の本を借りる姿が減ったように思います。

本は人生を豊かにし、夜道を照らしてくれる友です。また読書を習慣にすると基礎学力も上がると言われています。

夏休み前には新刊がたくさん入ってきます。ぜひ借りに来て下さいね。



夏休みの貸出スタート！7月8日（火）～、5冊！！

夏休みの貸出は8日からです。5冊も借りることができます。1学期の終業式まで、ずっと5冊貸出です。夏休みは時間がたっぷりあるので、シリーズ本や長い本を借りるチャンス！人気がある本は早い者勝ちです。早めに借りに来て下さいね。

また夏休みの宿題、読書感想文の課題図書は3セットしかありません。読書感想文を課題図書で取り組もうと思っている人は、早めに来て予約していくといいです♪
なお、夏休み本の返却期限は9月1日（月）です。



願いが叶うといいね～短冊を書きに来ませんか



7月7日は七夕です。図書館に、笹を準備しました。短冊にお願い事を書く風習は、織り姫にあやかって、「物が上達しますように」とお願いをしたのが始まりだそうです。あなたのお願い事は？ぜひ飾りに来て下さい。



「高中ジャンル別ベスト2位発表！」の掲示、始めました



図書委員さんからのリクエストで、ジャンル別に人気の本を2位まで発表することになりました（月毎）。ジャンルって何？という人も、ジャンルの紹介や、イエスカノーで答えていくと自分におすすめのジャンルが分かるチャートも掲示してあるので、ぜひ見に来て下さいね！

先生が好きなジャンルも掲示してあります♪あの先生は何のジャンルが好き？チェックしてみてね！



今年の「読書感想文 課題図書」はこれだ！

1, 2年生には朝読書の時間にブックトークをしています。読んでみたい本はありましたか。右の本「カンタン齋藤孝の最高の読書感想文」(齋藤孝/著 KADOKAWA)によると、「本にラブレターを出すつもりで読書感想文を書く」といいそうです！！



「わたしは食べるのが下手」(天川栄人/著 小峰書店)



小食で食べるのに時間がかかる葵は食事の時間が苦手。ある日、給食の時間に耐えられなくなって保健室に飛び込み、介助してくれた同級生の咲子から、会食恐怖症じゃないかと言われる。実は咲子も、勢いで食べては吐く、過食嘔吐症に悩まされていた。

そんな二人の学校で「給食完食月間」が始まる。食べたくない、でもみんなにも迷惑をかけたくない…と焦る葵に咲子はある提案をする。しかし、そのことが引き金となり、新しく赴任したイケメンの栄養教諭、橘川先生に宣戦布告されてしまう。

宗教上の理由のため、豚肉が食べられないインドネシア人のラマワティちゃんを加え、給食改革に挑む3人。食べることに困難を抱えた彼女たちはどんな解決の光を見つけていくのか。

食べることが大好きな人、逆に苦手な人、食に興味がある人、橘川先生の完璧な献立を知りたい人、食でなくても悩みを抱えている人…ぜひ読んでみて下さい。

「スラムに水は流れない」(ヴァルシャ・バジャージ/著 あすなろ書房)



主人公のミンニは、インド有数の主要都市ムンバイのスラム(貧しい地域)に暮らす、詩を詠むのが好きな12歳の女の子。しかしスラムでは、生きるのに必要不可欠な水が、一日たった3時間しか流れない。スラムにはムンバイの人口の40%が住んでいるのに、市全体にある水のたった5%しか供給されていないという。

ある日、お兄ちゃんのサンジャイとその友達が、水泥棒が水を盗んでいる場面に出くわしてしまう。命を狙われる危険があるため、家を離れ遠くへ行かなければならなくなったサンジャイたち。そして追い打ちをかけるように、ミンニのお母さんが、水の汚染による中毒で、お母さんの実家へと療養することが決まる。ミンニは、学校と家事と仕事(お母さんの代理)の3つをこなさないといけなくなってしまふ…。

果たして水泥棒は誰なのか。お兄ちゃんは無事帰ってくるのか。お母さんの病気は治るのか。後半は気になってページをめくる手が止まらないかもしれません。世界で未だに解決されていない水問題についてもぜひ、思いを巡らせて読んでほしい一冊です。個人的にはインドの食べ物が色々出てくるのがツボでした！ぜひ作って味わってみたいです。

「鳥居きみ子 家族とフィールドワークを進めた人類学者」(竹内紘子/著 くもん出版)



実際の人「鳥居きみ子」について描かれたノンフィクション、伝記です。

きみ子は、日本が戦争へと突き進んでいく不穏な時代に生きていました。その当時の日本の社会では、女性は男性に嫁ぐか、職業婦人として生きるかを迫られるという無言の圧力がありました。しかしきみ子は、女性が仕事に就くと家庭を持たないということに疑問を持っていました。そんなきみ子が鳥居龍蔵と出会い結婚をし、龍造の真っ直ぐな研究心に触れ、全く興味がなかった人類学の世界へと足を踏み入れていきます。龍造は現地へ趣くフィールドワークを得意としていたため、出産直後ながら、きみ子もモンゴルや中国へ渡ります。現地民族に溶け込みながら、伝統的な生活習慣や歌、童話、昔話などを聞き取り、きみ子のやり方で、フィールドワークを進めていきました。きみ子は、龍造の助手として尽くすだけでなく、共に「人類学」を追求した同志だったのです。

きみ子の生き方を辿りながら、自身の生き方について考えてみませんか。また実際の「柳条湖事件」にも遭遇しており、本の中に出てきます。歴史が好きな人にもおすすめです。

